

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：32510

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13887

研究課題名（和文）母語を異にする医師-患者間による医療面接における相互行為の会話分析

研究課題名（英文）Conversation analysis of interactions in medical interviews between doctors and patients with different first language.

研究代表者

加藤 林太郎 (Kato, Rintaro)

神田外語大学・留学生別科・講師

研究者番号：00803355

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、訪日外国人、在住外国人の増加を背景に、日本の医療機関で治療を受ける日本語非母語話者が今後一層予想されることから、日本語母語話者である医師と、日本語非母語話者である模擬患者の間で行われた模擬医療面接における相互行為を会話分析の手法で分析した。そして、そこで直面するトラブルに対し参加者がどのように対処して相互行為を遂行しているのかを考察した。考察の結果、トラブルに対処する際に参加者は医療面接で期待される【医師-患者】カテゴリーではなく、言語能力に言及することで【中国語非母語話者-中国語母語話者】カテゴリーを適用し、共通の言語資源である漢字を修正のリソースとして導入していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語話者と中国語話者の間で漢字が有益な言語的資源であることは以前から指摘されてきたが、それが実証的に明らかにされた例は管見の限り存在しなかった。また、このような言語的背景、特に非母語話者に言及することで相互行為上のトラブルを解決する方法は、互いの母語が違うからこそ行われた行為であり、これまで阻害要因として語られることが多かった母語の違いが、相互行為上のトラブルを解決するためのリソースとしても用いられることが分かった。このことは、多様な背景を持つ患者への対応が求められる医療機関や、異国で診療・治療を受ける日本語非母語話者に新たな方略を示し、医療への適切なアクセスに寄与すると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we used conversation analysis to analyze the interactions between a doctor, a native Japanese speaker, and a simulated patient, a non-native Japanese speaker, in a simulated medical interview. This is because the number of non-native Japanese speakers receiving treatment at Japanese medical institutions is expected to increase further in the future, against the background of an increase in the number of foreign visitors and residents in Japan. We then examined how the participants dealt with the troubles they faced and carried out their interactions. As a result, we found that the participants applied the [non-native Chinese speaker - native Chinese speaker] category by referring to their language ability, rather than the [doctor - patient] category expected in medical interviews, and introduced Chinese characters, a common language resource, as a corrective resource when dealing with problems.

研究分野：日本語教育 会話分析

キーワード：会話分析 医療面接 制度的場面 日本語非母語話者 外国人患者

1. 研究開始当初の背景

日本が様々な政策で短期滞在者、中長期滞在者の別を問わず外国人の流入を促進する一方で、その人々への社会保障はなかなか進んでこなかった。定住外国人は既にこの国におけるコミュニティの一員であるが、公共サービスの受け手として適切に扱われているとは言い難い。医療についていえば、中長期滞在者は国民健康保険への加入と保険料の支払いが義務付けられている。これはすなわち、国籍を問わずに日本における医療制度を利用する権利があることを示している。当然、定住外国人の中には日本語能力が十分ではない者もあり、そのために医療通訳サービスの拡大や、多言語併記による書類作成などの対策が採られている。しかし、日本に定住する外国人の言語的背景は多様であり、いかに多言語によるサービスを拡大しようとも、そこから漏れる者が出てしまうことは否めない。事実、医療通訳の利用率は低く、84.3%の病院で利用経験がないというのが実情である(厚生労働省 2017)。

反面、日本で医療機関を利用する外国人は増え続けている。日本病院会が 2015 年に行った調査では、669 の医療機関のうち、78.6%が何らかの形で外国人患者の受け入れ経験があると回答しているが、同時に受け入れ時の課題として 95.8%が「言語・会話(多言語対応)」を、次いで 44.6%が「医療通訳の提供体制」を挙げており、医療面接時のコミュニケーションが大きな課題であることが伺われる。

また、同調査では 88.5%の病院が英語での対応が可能であるとする一方、中国語は 27.9%、韓国語は 12.9%となっており、外国人患者の国籍バランスに対し非常に偏りがある。このことから、特に日本に在住する外国人にとっては、医療施設は重要な社会的インフラであるにもかかわらず、その多くが日本語を用いて受診せざるを得ないという状況が見て取れる。

2. 研究の目的

日本の医療機関で外国人患者が直面する問題としては、「言葉の壁」、「外見からくる先入観」、「異文化への不理解」などが指摘されている(寺岡・村中 2017)。だが、日本語非母語話者である彼らがどのように医療面接や診察、医療行為を受けているのか、そこで何が起きているのか、についての科学的な分析はほとんど行われていない。そこで本研究では、母語を異にする医師-患者間がどのように相互行為を行い、協働的に目標を達成しようとしているのかを、模擬医療面接の分析から解明することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、医師役 2 名と患者役 3 名(中国人 2 名、日本人 1 名)の間で計 6 例の模擬医療面接場面を収録した。医師役は日本語を母語とする現役の医師であり、患者役には医療従事者ではない者で、外国人の場合は中長期在留者を対象とした。患者役の参加者には、藤崎ほか(2015)を参考に作成した模擬医療面接シナリオを中国語に翻訳したものを配布し、30 分間の準備時間を与えたうえで模擬医療面接を行った。シナリオには、言語的なやり取りがより必要となるであろう「内科的症状」の「初診場面」を採用した。医師に対しては口頭と書面で、外来患者の主訴のみを事前に伝え、模擬患者を診察室に呼び入れて医療面接を行うことを指示した。なお、今回の模擬医療面接においては医療面接のみを行い、研究倫理的配慮から身体診療や診断は行っていない。そのため医師には、必要な情報の聞き取りが終わったら別室で診察をする旨を伝え、退室を促すようにと伝えた。

面接は大学医学部内の模擬診察室で行い、その様子を天井に設置されたカメラ 2 台と、卓上の IC レコーダーにて収録した。また卓上には、医師への指示用紙と筆記具を併せて配したが、これは模擬医療面接時にその紙をカルテに見立ててメモ等に用いることができるようにしたものである。

収録した音声と映像については、会話分析(Conversation Analysis)の手法を用いて分析した。音声を基にしたトランスクリプトの作成は西阪(2008)の記号を用いて行った。参加者の動作については、城(2018)の方法を参考に記述し、その中で特に右手と視線の動きに着目した。

4. 研究成果

本研究の期間中に Covid-19 が発生した影響は小さくなく、本来は母語や学習歴などを加味してより多くのデータを収集する予定だったが、対面での会話が制限される中では不可能だった。そこで、上記の計 6 データのうち 1 例の中に見られた修復連鎖を微視的に分析することに注力した。それにより、参加者が机の上に置かれた「メモ用紙」と、自身の属性である「成員カテゴリー」を修復の資源として相互行為に導入し、利用していることが記述された。

まずメモ用紙についての分析からは、相互行為における物質的な資源の用いられ方について、2 つの点を指摘することができる。1 点目は、相互行為における物質的な資源は、たとえそれが特定の目的をもって用意されたものであっても、逐次的にその役割を変化させながら相互行為の進行と遂行のために利用することが可能であるということである。ここでメモ用紙は本来指示のための用紙として机の上に置かれていたが、医師はそれを裏返すことにより、それまでに書か

れたメモや指示内容が見えないようにし、その上でそこに漢字を書き込むことにより修復を遂行しようとしていた。これにより、メモ用紙は記録参照のための資源から、何かを書くことによる修復のための資源に変化していることが分かる。そして2点目は、直接的な修復の道具としてだけではなく、相互行為の進行段階を示すこともできるということである。医師がメモ用紙を裏返したのは、医師が患者役の不理解表明に対して、メモ用紙の表面に残された記録を言葉と視線で示しながらそのトラブル源は既に解決済みであることを示したにもかかわらず、患者役が言い淀みを多く含みながら発話を継続していた時である。すなわち、ここで当初メモ用紙は記録の参照による修復の資源として用いられていたが、それが裏返され記録の参照が不可能とされたことにより、現在志向している修復連鎖の方法が変わることを示すための資源へとその役割を変化させている。このように、修復の資源としてのメモ用紙は、その具体的な役割を逐次的に変化させながら参与者に用いられていた。

また、医師はこの修復連鎖の過程において、幾度か自身の言語能力について言及し、成員カテゴリー化を行っている。例えば、医師は修復の初期段階に「日本語しか分かんないですけど」という発話を行っているが、これは自らを「日本語母語話者」カテゴリーに位置付ける行為である。しかしこの行為は、この医療面接における使用言語を日本語に固定するものとして機能し、結果、患者役の修復が失敗することに繋がっているように見える。すると医師は「英語だとトゥエークアオシスっていうんですけど」と日本語以外の言語能力に言及し、使用言語の限定を解除する。そして「結核ってどう書くんだっけな」「結核って漢字だと:(.)こう書くんですけど」と発話しながら、裏返されたメモ用紙に漢字で「結核」と記入し、「これあってる?」とメモ用紙を見せながら患者役に問う。それに対し患者役は「はいそうです」などの評価的発話で回答していることから、患者役に漢字についての知識があることを前提に「質問」-「応答」連鎖が行われていることが分かる。その後の「これ結核これ中国語でも結核っていっうんですか」という問いを含め、ここで患者役には「中国語母語話者」カテゴリーが適用され、母語である中国語の知識を利用することができるようになっていく。このように、修復の過程において参与者は自らに適用される成員カテゴリーを変化させながら、その遂行にあたっている様子が記述された。

今後、上記の分析・記述をより精緻にした論文の発表を目指すとともに、医療面接のような制度的かつ非対称的な相互行為場面の分析を通じ、参与者の持つ特権がどのように相互行為の遂行を促進・阻害していくのかという点についても考察を進めていきたい。

【参考文献】

- 厚生労働省 (2017). 医療機関における外国人旅行者及び在留外国人受入れ体制等の実態調査
城綾実 (2018). 相互行為における身体・物質・環境 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・
城綾実編 会話分析の広がり, pp.97-126. ひつじ書房
寺岡三左子・村中陽子 (2017). 在日外国人が実感した日本の医療における異文化体験の様相
日本看護科学会誌, 37, 35-44.
日本病院会 (2015). 平成 27 年度「医療の国際展開に関する現状調査」結果報告書〔抜粋〕
西阪仰 (2008). トランスクリプションのための記号
< <http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> > (2020年1月24日)
藤崎和彦・川上ちひろ・加藤智美・高橋優三 (2015). 模擬診察シナリオ集 医療の現場が透けて
見えるスケルトン病院 第6版 三恵社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤 林太郎
2. 発表標題 接触場面における漢字を用いた修復連鎖のマルチモーダル分析 日本語母語話者医師と中国語母語話者模擬患者の模擬医療面接から
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤 林太郎
2. 発表標題 制度的場面における異母語者間相互行為の会話分析に向けて-模擬医療面接場面のデータから-
3. 学会等名 竹園日本語教育研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------